お盆

藤原 暢子
*text by Fujiwara Nobuko

パンッ、パンッ、パンッ。

「何、どこにいるの？ 後ろで銃声が聞こえているよ」。東京・神田の会社から電話をかけてきた上司が、慌て気味に尋ねる。

「休みを申請しておいたじゃないですか。長崎、五島のお墓にいますよ。銃声じゃなくて、爆竹の音ですよ」と説明するが、理解ができていない様子。仕事の話のようだが、さらに激しくなる爆竹音で上司の声がかき消される。

八月十三～十五日、東京のほとんどの会社は通常通りに動いている。お盆に合わせて休みを取る人も少ない。私も締め切り前なので、その風潮に従いたいが、そうはいかない。

四人姉妹で、私以外の姉たちは長崎市在住なのだが、お盆にお墓に行くのは、私の役目になっている。ハイシーズンで東京からの飛行機代が八万円、さらに五島までの飛行機代や船代がかかっても、休みが二日しか取れなくても、なぜか私が〈墓守担当〉なのだ。

父方も母方も祖父母は、晩年を長崎市内で過ごしたので、五島にはお墓だけがある。長崎市内からジェットフォイルでやってくる母と福江のホテルで落ち合い、お寺に向かう。

お墓とお墓の通路は人だらけで、銀座より混んでいる。一つのお墓に二十名以上集まっているところも少なくない。浴衣を着た子供たちが始めた花火は次第にエスカレートして、大人が加わり大掛かりな花火になっていく。何百というお墓が灯籠で飾られ、ディズニーランドのように光と人であふれている。そんな長崎のお盆の写真を見せると、東京の人は皆、ギョッとする。関東のお墓参りは日中三十分ほどで、あっさりと終わるものらしい。「メキシコでも年に一回、お墓に人々が集まって食事や歌を歌って死者と交流するらしいよ」と、長崎は〈海外扱い〉なのだ。

母とぼんやりお墓の前で過ごす三日間は、倍速で過ぎていく東京での生活がいきなりスローモーションに切り替わる大切な時間だ。特にどこにも行かず、夕方お墓の前に座って、父母の幼い頃の思い出や祖母たちの苦労話を聞く。花火で打ち上げたおもちゃのパラシュートを探す子供たちが周囲を走り回っている。

「こうやって育つと、子供にとってお墓って怖いところじゃなくなるね」と言いながら、今年もまたその風景をデジカメに収める。

〈自分のルーツ〉と自然に繋がることができる長崎のお盆はこの華やかさと爆竹音あってこそ。暗黙のうちに、〈墓守〉を買って出ているのは、私自身なのかもしれない。